

道庁の所在地だけに都会的である。ユースホテルに宿泊したのが変化があつて良かった。明日は市内見物である。この夜は友と連れだつて、サツポロビールをちよつぱり(?)味わう。さすが本場だけにおいしい。その後、90メートルのテレビ塔展望台から夜景を眺め、大通り公園をぞろぞろと、焼きたて、蒸したてのとうもろこしを食べながら散歩しやれこんだのが楽しい思い出となつている。

朝食は和食だつたのに牛乳が添えられていて、やつぱり北海道だな、と感じたこと。町で買ったサクランボが艶々して大きくて赤くて、とても甘かつたこと。夕食に珍らしく野菜がどつさりついていて喜んだことを最後につけ加えておこう。



札幌 → 層雲峽

4班 短食2の1,2
(小林, 木村, 大年, 岸山)
(戸室, 松沢, 藤村, 玉尾)

7月19日(第5日目)

本日のコース札幌市内一月寒一層雲峽。

大体において札幌の町は夜の方が趣きがある。前夜、トウモロコシの匂いで一杯だつたテレビ塔前的大通りも、昼間見ると上品ぶつていかにもとつつきにくい様子をしている。こんな所は早く通りぬけて植物園へ。

この植物園、京都のそれよりも規模は小さいが高山植物コーナーがあつたり、京都では見られないような樹々が多くあつた。園内に博物館があつて、熊に噛まれて切断した人の腕だとか、熊の胃の中にあつたアルミの弁当箱なんぞが陳列してある。しかしまあ、この熊もお腹の中で消化の悪い弁当箱とお菜入れがぶつかつて、ガラガラ音がした時はずいぶん驚いたことだろう。ここではもつとゆつくりしていたかつたが制限時間一杯で高山植物園から引っぱり出された。出口で黒ゆりの球根を3つ100円で売っていた。

次に北大のクラーク博士の像の前で記念写真を取つた。Girls be ambitious/名物のポプラ並木も見せてもらえないので、ここの所は書かないことにする。

雪印工場も見学したが、見学の団体がワンサといて、案内嬢がマイク片手に説明するのを聞きながら工場内を一巡して、一個20円也のアイスクリームをもらつてサヨウナラを

した。アイスクリームがチョコレートの中につけられてはクルクル回っている所は、面白かつたけれども、後からやつて来る人の波に押されてすぐに工場の外へ出されてしまった。毎日あれだけの団体に無料でアイスクリームを配っていた日には、破産しないか、と他人事ながら少々心配になった。が、よく考えてみるとアイスクリームは半分以上空気の泡で出来ているのだから、我々はアイスクリームのあまりの冷たさに泡食つて、空気の代金にしては高すぎる金額を雪印に支払っているのだろう。

月寒の羊ヶ丘ではジンギスカン鍋を食べさせてくれるものと思っていたが、あにはからんや、コンブ巻きやツクダ煮の入った駅弁まがいの昼食であつた。

羊は毛を刈り取られ、スマートな夏姿である。よく写真で見る羊は丸々太っているが、あれはほとんどが毛の厚さで、実際は犬よりも華奢な体つきをしている。

月寒から層雲峡までは見る所もなく、バスはたゞ走り続ける。我々一同もバス同様、(特に先生方は)たゞひたすら夢の国へ。

ところで真夏の本州から北海道へ来ると、季節の感覚が全くなくなる。日射は強いが湿度が低く風があるので涼しく、晩春から初夏の頃の気候であるし、第一、菜の花や馬鈴薯の花が、今を盛りと咲き匂っている。油照りの太陽を追つて、ジリジリと向きを変えるヒマワリはここでは見る事が出来ない。

旭川を過ぎると道端の溝に「忘れな草」が群がって咲いていた。左手にヌタクカムウシソベ(大雪山)にかかったガスを見ながら、石狩川を溯つてようやく宿舎、層雲閣へ到着。

層雲閣に「鈴木さん」という名普番頭さんが居る。定年で退職したが遊んでいるのはどうも、と言う訳で、この旅館で働いているのだそうだ。この人については、いろいろと面白い話があるのだが、それを全部書いていると、一冊の本が出来るのでここではやめておく。たゞ彼が我々の部屋で素晴らしい喉を聞かせてくれたことは特筆に値すると思う。この宿に1人のアイヌ人が居る。宿から月給をもらつて客に熊彫りを見せているのである。彼とも友達になつた。150cm位の背の低い男である。彼は言つた。

「黒ゆりを買つたかい？ あれが3本咲いたらダメなんだヨ」

黒ゆりは途中から莖2本に分かれ、花が二輪咲く。一輪は自分に、一輪を恋人にささげると2人は結ばれるという伝説が、黒ゆりの花にはあるという。……

